

52 非交通性水頭症をきたした膜様物による Magendie 孔閉塞の1例

関 慎太郎・永山 徹・大石 琢磨*

平戸 純子*・中里 洋一*

白河厚生総合病院脳神経外科
群馬大学大学院医学系研究科病態
病理学*

1958年初めて報告された Magendie 孔閉塞による非交通性水頭症は、報告が少なく稀である。Magendie 孔が膜様物にて閉塞し、画像上全脳室系の拡大を呈する非交通性水頭症で発症した1成人例を経験した。

症例は54歳女性。2年前から散発的に dizziness が出現、本年1月初旬から頻繁となり、後頸部痛も出現し入院。入院時意識清明、乳頭浮腫が認められたが他の神経学的異常所見なし。翌未明より嘔吐出現、徐々に頭痛増悪したため、入院2日目に脳室腹腔シャント術を施行し症状は軽快した。しかし画像上脳室の縮小が得られず、入院15日目に後頭下開頭にて Magendie 孔全体を完全に塞いでいる膜様物を確認し、除去したところ勢いのある髄液の流出をみた。膜様物の病理所見は線維性結合織が主でグリアと脈絡叢上皮を認めた。画像上脳室の大きさは縮小し、神経学的異常所見無く退院した。

53 巨大脳内血腫の治療成績の検討

伊藤 勝博・竹村 篤人・奈良岡征都

畑山 徹・鈴木 重晴

青森市民病院脳神経外科

血腫量の多い脳内出血症例において、救命目的に早急な血腫除去を要する。しかし救命しえた症例においても機能予後は必ずしもよいとはいえず、緊急手術の局面で、家族に正確な理解が得られていないことも多い。そこで当科の巨大脳内血腫症例の治療成績について検討を行った。

巨大な高血圧性被殻出血及び脳内血腫を伴うクモ膜下出血を対象とし、開頭血腫除去を行った症例と保存的治療症例の比較を行った。検討項目は年齢・血腫局在・血腫量・意識障害の程度・再出

血の有無・合併症・既往歴で、予後については気管切開や経管栄養の必要性についても検討を行った。手術の施行に関しては、年齢と既往歴が大きく影響し、むしろ機能予後を左右する血腫局在や血腫量は関与が少なかった。保存的治療症例の半数以上は家族の希望が反映された結果であった。更に動脈瘤破裂による脳内出血の場合、機能予後もよく、積極的な手術を要すると考えられた。

54 脳内出血を発症した第V因子欠損症の1乳児例

中川 敦寛・刈部 博・小沼 武英

平野 孝幸・亀山 元信*・近岡 秀二**

土屋 滋***

仙台市立病院脳神経外科

同 救命救急センター*

同 小児科**

東北大学病院小児科***

乳児期に脳内出血を発症した第V因子欠損症の1例を経験した。

症例は1ヶ月、女児。兄がダウン症である以外に特記すべきことなし。37週、自然分娩で出生したが、出生後頭血腫の増大、臍帯脱落部からの出血遷延を認めた。その後問題なく経過していたが、生後36日目より頻回の嘔吐、活動性低下出現し紹介入院となる。入院時、大泉門の膨隆を認め、CTでは左大脳半球、大脳鎌、小脳テント近傍の硬膜下血腫と左大脳半球、右前頭葉、頭頂葉と広範囲に低吸収域を認めた。採血上、貧血(Hb 5.1)、凝固異常(PT-INR 6.47)を認め、第V因子欠損症(活性値<1%:正常50-200%)と診断された。直ちに新鮮凍結血漿輸血を週2,3回程度行ったが、3週間後にも硬膜下出血を再発し、既に低吸収域を呈した病変はCT上 gyral high density を呈し、その後萎縮をきたした。本疾患の頻度は100万出生に1人と稀であるが、周産期発症が最も多く、新生児頭蓋内出血の一因として考慮すべきものであると思われた。